

1. 異文化から学ぶべきこと

そもそもイスラーム世界、例えば金融の関係ですとどうでしょうか。レバノンとかドバイとのお付き合いがある方も多いかもかもしれませんが、イスラーム世界と付き合うというと、通常の日本人は何かわけの分からない所だとか、狂信的だとか、テロリストだとか、こんなイメージが相当強いのではないかと思います。ところが、その一方で、それではイスラームとは一言で言うとは何でしょうかと聞くと余り答えられる方がいない。これも事実じゃないか。つまり、よく分からないけれども悪いイメージばかりが先行しているというのが中東やアラブ世界に対する一般的な日本人の認識ではないかと思います。

私がカタールに住んでいる頃だったでしょうか、日本でオウム真理教のサリン事件がありました。あの事件が起きた時に、私の友人のアラブ人が私のオフィスに駆け込んできて、「大野、知っているか、日本中がサリンだらけだ」と言うのです。勿論、我々はその事件は、特定の場所で特定の団体が特定の時間に起こした事件だと知っているのです。ところが、アラブ人がテレビの画面だけ見ていて、あるいは、新聞の写真だけ見ていて、確かに日本中サリンだらけという印象を抱いても不思議ではないと思います。逆に我々日本でテレビを見たり、写真を見ていると、アラブ中テロリストだらけに見える。そういう可能性もあるかもしれないのですが、ただ、住んでみると、隣にいるアラブ人は我々の日本人の友人とそんなに変わら

ないと申し上げてもよいと思います。

ほかにもいろいろな印象があると思います。例えばアラブというと砂漠の国と言いますが、必ずしもそうではないのです。というのは、特に人が住んでいた地域というのは文明の揺籃であり、例えばあのシュメール文明というのはメソポタミアの文明、世界最古の都市文明ですが、これに代表されるように、アラブとは、水のある地域の都市あるいは農業で潤ってきた文明です。私が専門にしてきたイラクという国が、ビールの発祥地というのはご存じでしょうか。ドイツだと思っている方が多いかもしれませんが、いわゆる石板で書かれたレベルで紀元前二〇〇〇年以上前にイラクからビールの作り方が最初に発掘されています。つまり、その頃水を沢山必要な大麦が豊かにあの辺では実っていて、それを刈り取ってお酒を作ってコミュニケーションしていた。こういうのがもともとの中東アラブ世界の本来のイメージではないかと思います。

しばしば我々はイスラーム世界やアラブ世界に我々のイメージというものを被せてしまって失敗することが多いのではないかと思います。実は、私がイラクに最初に赴任をいたしまして、住んで数ヶ月たった頃、私、中東が大好きになった。その理由というのは、もともと私は大学でヨーロッパの思想を専攻していて、ヨーロッパの思想の親の一つとして中東がありますので、中東の政治思想みたいなものを勉強したいと思ってイスラームの方を見に行ったのです。そういたしましたら、面白くなって仕方がなく

なって、そのままイスラーム側に移ってしまったのです。そしてイラクに行って、とにかく毎日が楽しい。何故かと言うと、多分日本人の感覚から一番ずれています。殆ど毎日、何でこんなことが起きるのだろう、何でこんなことを言うのだろうということが、本当に毎日起きて、私は二十四、五だったのですが、とにかく毎日が楽しくて仕方がなかった。

その頃、国連から日本人の国連開発計画（UNDP）の方がイラクにお越しになった。この方はいわゆる産児制限（バース・コントロール）の専門家で、ある日その方と私は食事を共にしました。その方が言うには、

「イラク人には教育が足りない。何故かと言うと、先天的な障害者と先天的な障害者同士が結婚をして子供を生む。だから先天的な障害者が生まれる。こういうことは改めさせなければいけない」ということでした。私は、当時すっかりアラブに魅入られていましたので、これは逆ではないかと思ったのです。というのは、イラクにはごく普通に町の中に障害者がいるのです。それがごく普通に社会の中に受け入れられている。そして、その人達への寄附も含めて彼らが普通に社会の中で生きている。我々の社会は、もし障害児が自分の子供に生まれてしまうと隔離する、あるいは生まれる前でも、この子障害者かもしれないので中絶しましょうかとなる。こういう社会は、確かに障害者同士の結婚を受け入れない社会かもしれない。しかし、アラブ世界には弱者を受け入れるシステムがある。つまり、必ずしも国連や我々の世界が進んでいるわけではなくて、彼らの側からも学ぶべ

きものというのはい多いのではないかということをお時私は強く感じたのです。そういった経験が逆にアラブにもっと学ぶことがもしかするとあるのではないか、我々の方が優れているように見えることも多いけれども、その中にはアラブから教えてもらえることもあるのではないかなというのが一つ感じたのです。

2. 異文化と接するということはどういうことか

(1) 個の強さ

ただ中東の人々の極めて悪いところとして、非常に個人が強い。我が強いと言いますか、相手に対して合わせる気持ちが乏しい。その例としてこれは比較的有名な話ですが、九・一一事件があった後、これはアラブではなくてこれは隣のイランの話ですが、アメリカは当初九・一一事件の背後にイランがいるのではないかという疑義を呈したことがありました。その頃ですが、イランの週刊の新聞で論説が沢山出ている。この論説の中に極めて面白い記事がありました。

それは「イランが九・一一事件に関わっていない理由」というタイトルでした。どういふ記事だったかというところ、九・一一のテロの犯人は定められた時刻に皆が集まって、一人の指導者の下にきちんとした指揮系統がとれた行動をしている。そして皆がほぼ同時刻に突っ込み、アメリカを困惑させた。さあ翻ってみよう。イラン人はどうだろうか。君たちが十人の仲間を呼んだ時に、同じ時刻に集まったことがあっただろうか。一人の指揮

系統のもとに誰も文句を言わずに行動を起こしたことがあっただろうか。大事なことをするとき、決して誰にも秘密を漏らさずに実行したことがあっただろうか。その後実は延々と物語が続くのです。「僕ねえ、今ニューヨークに来ているんだ」と自分の奥さんに電話するわけです。そうすると奥さんが「何言ってるのよ、私、ニューヨークに一緒に行きたいって言ったじゃないの」「いや、そうじゃなくて、崇高なイスラームの使命のために来ているのだ」「私はティファニーの方が大事だわ」と、こういう話が延々と続くのです。それでまあ結果として、最後にこれだけイラン人が関わっていない理由がそろっているのに、九・一一のテロ犯人がイラン人であるわけではない、こういう論説だったのです。

この皮肉った論説に示されるように、彼らは、個が強いところがあって従順ではない。つまり、これを逆から言うと、我々がイスラームの文化を理解することはまだ出来ても、向こうがこちらを理解するという態度にするのは難しいかもしれない。これも私、中東で強く感じたことでありました。

しばしばそう思ってきたのですが、もう一つ思ったのは、もしかすると我々の理解をしようとする態度自体が間違っているのかもしれない。異文化と接するというのはどういうことなのかと考えた時に、例えばですが、イスラーム教は豚を食べることを禁じているのはご存じでしょうか。豚を食べてはいけないのは何故かということについて、日本のイスラーム概説

書を読むと書いてあります。幾つも説はありますが、それによりますと、イスラーム世界はもともとサウジアラビアの暑い所から始まった。かつてイスラーム世界にも豚は住んでいました、オンム・ハンジール（豚の母島）という地名も残っていますから。この豚ですが、イスラーム関係の多くの概説書には豚肉は腐りやすい、虫も出やすい、そのような汚いものは食べてはいけないと説明してあるのです。我々はああなるほどと言ってこれで接してしまうのですが、イスラーム教徒にとって豚を食べてはいけないという理由はこんなものではありません。理由はただ一つです。何故か。神様がだめだと言うから食べてはいけない。これ以上でも以下でもない。つまりこの所を理解出来ないと、我々なかなか宗教に接しても、特に一神教に接することが難しいのではないかと思います。

(2) 相対的価値観

そんな中でイスラームと付き合う上で我々がしばしば奇異に感じるのは、価値観が全く違うということです。例えば、ここにグラスがあります。これを私が買い求めました。今日これを二百円で買って、帰ってみたら素晴らしいグラスなので皆さんにお分けしたいということで、次の日に「これを二百個ください」と行くと、昨日二百円だったものが三百円と言われるのです。これはどういうことかということ、彼らいわく、「君は二百円でこれを買って帰った。家に帰って素晴らしいと思ってわざわざ舞い戻ってきた。しかも二百個も欲しいと言う。だったら、昨日二百円だったものを三

百円払ってもいいじゃないの」、こういう議論をします。購入者の価値観に沿った価格を主張するのです。現実買い物に行っても、背広を着てピシッとした格好で行って買い物をした場合とよれよれのTシャツを着て行った場合とで値段が違うというのは、しばしば我々は中東の世界で遭うことだと思います。彼らから見れば、一カ月百万円の収入がある人にとっての一万円と、一カ月十万円の収入がある人にとっての一万円の価値が違う。つまり、相対的価値というものがそこに存在する。我々と違う価値のパラダイムをどうも持っているようなのです。

私は大学院の頃にエジプトに数カ月住んでいたのですが、その頃、語学学校に通っていました。時々遅れそうになると、貧乏学生だったのですがタクシーで行くことがありました。タクシーで行っても百円ぐらいのところなのです。ところが、時々吹っかけるドライバーがいて、いつもは百円で行く距離を二百円とか三百円とか言うのです。その時に私が「違うだろう、ここはいつも百円で行くんだよ」と言うと、運転手は、「いや、そうは言ってもね、うちは子供が八人いてさ」という話をするのです。日本人であれば、「そんなことは関係ない、百円は百円だ」という絶対的価値観で議論してしまいましたが、彼らにとっては八人子供がいる人にとっての百円と、子供がいない私にとっての百円の価値は違うだろうという議論です。勿論、そこで正解は、私は子供が十人いると言えればいいのですが、それも言えないので実際にやったことは、自分が以下に貧乏かをアピール

することでした。その時に私はエジプトで買ったサンダルを履いていました。このサンダルを見せたのです。「私は学生で、このエジプトで買ったサンダルが半分くらいに薄っぺらくなるくらいまで履いているんだよ、可哀相だろう」と話をしたのです。そうしたら、その運転手が同情してくれて、そのまま学校へ行こうとした私を彼の家まで連れて行って食事をさせてくれました。これは本当の話ですが、そういう相対的な価値観というものがある。

彼らは、相対的価値判断を行う上で、相手の立場を知ろうとする。例えば相手の収入、出自、考え方あるいは国籍こういったことも含めて全部知りたいわけです。これは社会を円滑にするコミュニケーションなのです。したがって、お金の交渉というものが人間関係を築く上で極めていい手段になります。そして最後、話がまとまると、通常握手をして別れるわけですが、これが交渉を通じて相手と仲良くなる良い方法です。多分、日本的に言うと、オフィスに同僚が配属されてきて、その場では仲良くなれないけれども、ある日酒を飲みに行って、上司の悪口を言ったら次の日から仲良くなった、こういう世界と同じかもしれません。つまり、相手の腹の底を探るということを商売を通じてやろうとするのです。

ハディースというのは預言者ムハンマドの遺した言葉ですがけれども、その中でも袋の中で行う商売をしてはいけないと書いてあります。これはどうということかということ、当時端切れを売る商人が袋の中にこれを入れてき

て、手触りだけで商売をさせていたのです。そうではなくてきちんとあけっ広げにしてお互いの条件をきちんと話し合うことが正しいということが出てきます。商売に際しての十分なコミュニケーションと正直さが、奨励されているのです。

3. イスラム経済の特徴

(1) 人間の役割・・・神との契約

こういった価値観の上に向こうでは若干我々と違う経済、あるいはイスラム金融などと呼ばれるものがあるようだとする雑誌や本などをしばしば見ると思うのですが、これはなかなか上辺だけでは分かりません。「利子を取らない銀行ですよ」と言われてもなかなか分からないと思うのですが、このまず根底にはイスラム教の教えがあります。というのは、我々の宗教はどちらかというとなら現世とは余り関係がなくて、あの世のこととか次の世代のこととか、そういったものが中心ですが、イスラム教は現実の世界を沢山規定しているのです。これは恐らく歴史的なものです。というのは、たとえば、キリスト教はある意味で大失敗から始まった宗教です。最初に張りつけにされて、弟子が逃げて、その後弟子が集まったという所から始まった宗教ですが、イスラム教の場合には、最初の預言者ムハンマドが生きている時に世界で当時最大の帝国を築いてしまったのです。ということは、宗教が政治の話、経済の話、法律の話、社会の話、これを規定しないと国が保たないという性質を持っていましたので、もともと現世

の全てのものを規定するような性格が強かった。経済も同じなのです。

これが上の方から倫理観から流れた一貫した議論をします。例えばイスラーム教では人間の価値というものを定めています。これは人間だけの価値です。すべての創造は神が行うのですが、その中で人間は特別な性質を持っています。例えばコップは神があればというようにしかないのです。犬は神があればというような状態でしかない。ところが、人間に与えられた一つの特性は自由意思です。つまり人間だけは神様を信じないことが出来るほどの自由な意思を持っている。神様がこうしろと言うことを行わない、背く自由すら持っている。これが人間の特性です。人間だけにこの特性を与えたために、そばにいた天使が嫉妬します。そして神様にそんな特性を与えるのはおかしいというのが実はイスラーム教のサタン、アラビア語ではシャイターンと言いますが、悪魔の物語なのです。この天使、いわゆる聖書で言うところのジブリールは墮ちた天使になりますが、イスラームでは、彼は墮ちるわけではないのです。「それでは、神様、人間に与えたこの自由な意思を私は惑わしてご覧にいたしましょう。そして最後の審判の日には神様のおっしゃることを人間が実践出来るか出来ないかを試してみてください」と言うのがイスラーム教のサタンなのです。だから、イスラーム教にはハルマゲドンはないのです。いつまでも神様の弟子の天使ですから、神様と拮抗するほどの力はない。人間に与えられた特性に対して、悪魔は悪いことをささやきます。

(2) 退蔵の禁止、利子の禁止

宗教はいいことを教える。これが宗教の位置で、敬虔な信徒は、たとえ自由な意思を持っていてもこれを実践する必要がある。イスラームでは、神様からもらった肉体を十分に活用することが人間の義務です。これが人間に与えられた役割、義務なのですが、この中で神が与えたイスラーム法は幾つかのことを決めていきます。例えば一番大事なこと、人間が与えられた体を十分に使うことについて言えば、不労所得はだめなのです。どうということかと言うと、自分が働かない、自分がリスクを負わない投資、これは禁止ということになります。イスラーム銀行ではしばしばリバー（利子）が禁じられていると言いますが、これはあらかじめ決まっています保証されている利息が駄目なのです。株式投資や信託はいい。予定利率も、リスクがありますからいい。そうは言っても言葉だけじゃないかということそのとおりですが、ただ、金融取引の底にも脈々とイスラームの教えがあるわけです。現実にイスラーム銀行へ行っても予定利率二、三%などと書いてあります。そしてさらに細かくこういった所に投資をします、こういったリスクの場合には云々と約定はあるのですが、ただこの約定、我々が定期預金を作る時と一緒に殆ど読まない約定ですので、まああろうがなかろうが、要するに決まってようが決まっていまいが利息は付くものだというのが現実だとしても、彼らの意識は全く違うということです。

このお金も物も神様が作った物です。ということは、これはすべて所有

権は神様に属します。このコップを私が持った瞬間、このコップを万全に使うことは私にとっての義務です。何故ならば、これは神様が持っている所有権をお借りしている。つまり用益権というもの、利用権というものを常に我々は与えられているという感覚を持っています。したがって、我々が仕事をする時も機械を動かす時も物を作る時も、すべて神様の物であるから、これを大事に存分に使うことが人間の役目なのだというのが教えなのです。勿論、教えと現実が違うことはしばしばありますが、教条的にはそうなのです。

不労所得の禁止の問題は富の退蔵の禁止につながります。富の退蔵あるいは死蔵ですね。要するに蓄えておくことがいけない。富は常に回らないと人々を潤さないというのがイスラーム教の教えです。常に利子が保証されて銀行の中にお金を預ければ儲かるのとすれば人間は働かない。リスクを負わない利子で生活することはいけないというのがイスラーム教の教えです。あるいは日本のように低利率だと働かなければいけないということはあるかもしれませんが、いずれにしても、そういったことが禁止されている。

それだけではなくて、この富の退蔵を招かないために彼らはザカートあるいはザカーと呼ばれるシステムを持っている。これは一部の専門書では宗教税と書いてありますが、どちらかというとな社会的プーリング・システムです。これはどういうことかというとな、例えば一年間で私が五百万円の

収入がありました。その内三百万円使いました。残りは二百万円です。この二百万円は余剰分ですが、この内の一〇%を差し出すわけです。この差し出した物を貧者に施す。但しこれは匿名でやるのです。直接自分が誰かにあげてもいいのですが、名前を出してこれをやるのではなくて、この富が還流するシステムの中に匿名で入れなさい。これがザカートのシステムです。そうすると、一年間使わなかった富、退蔵された富、集まった富がどんどん還流していく。あるいはそれが嫌な場合には使ってしまう、それも富の還流ですね。あるいは投資をするか、これも還流です。これをイスラームは宗教の中で定めています。そしてそれが公正に分配されるということ、可能な限り保証するということを期待しているわけです。

(3) 株式会社発生論——ラクダ貿易——

例えば投資がだめな場合には本来会社は出来ません。ところが、イスラーム教の場合にはもともとこういう株式会社のものになるようなものがあります。かつて大学の時に大塚史学の『株式会社発生史論』を読みましたが、あの頃確か書いてあったのは、株式会社の発生はイタリアのコンメンダ・ソキエタスというものにまで遡れるという話でした。実は、地中海は当時お互いに行き来が極めて盛んでございまして、レバノンあるいはキプロス、あの辺のいわゆるフェニキア人が地中海を存分に走り回っていたわけです。イスラーム勢力がスペインを征服したことがありました。かつてラテン語の原書を私の友人に読んでもらった時に、確かマラガから今の

マドリッドの近郊まで日に当たらずに行けたという記述があるのです。つまり、ずっと森だったというのです。ところが、現在スペインに行くと大体土漠というか不毛の地みたいな所じゃないですか。つまり、そんな森があるような所ではない。ところが、当時はずっと木があったそうなのです。調べてみましたら、どうも占領したイスラーム軍がみんな切ってしまうって地中海を渡るための船にしたのだそうです。それぐらい地中海の世界というのは狭く、交流が盛んであったわけです。

現実にも今も食事などもそうです。アラブに行きますと、トルコ・コーヒーというドロツとしたコーヒーがあります。これは地中海の方、つまりアラブから見てトルコから来たコーヒーという意味ですが、ヨーロッパに行くところをギリシャ・コーヒーとか言い、地中海側を起源と考えています。割りと似たような文化をお互いに持っているわけです。

話がちょっとそれましたが、株式会社発生論もコンメンダ・ソキエタスが出来る前にアラブ・イスラーム側にあったのです。これをムダーラバ、ムシャーラカと呼んでいます。当時、ラクダ貿易が盛んでした。ラクダ貿易を行うときにラクダを集めて投資をして、例えばアフリカからコショウを買ってくる。それを持ってきてヨーロッパの方に送って儲けるというラクダ貿易がありますが、この時に投資家からお金を集めるのです。百万円ずつくださいと言って集めて、これを原資にして向こうに行く。戻って来ると株式会社というか、このムダーラバ、ムシャーラカは解散します。そ

ここで清算をして余剰がある場合には例えば百二十万円返って来る、こういう投資ですが、途中で山賊に襲われた場合にはすべてがパーになって、百万円の投資分がなくなってしまう。これをムダーラバとかムシャーラカという契約形式としてイスラームは規定しています。このラクダ貿易と同じ形態がコンメンダ・ソキエタスで、恐らくイタリアに行って新しくなったのは、そこに保険が付いた。船の保険が付いて多分大きくなっていった。より大きなビジネスが出来るということになったと思うのですが、いずれにしても、イスラーム世界では当初より極めて合理的な経済論というものがあった。但し、その合理的な経済論に見える根っこには宗教という不合理なものがあったり、あるいは価値観の違うところからこれをいかに集約させるかというルールを定める必要がそこにあったというのです。

4. イスラーム教とキリスト教

(1) 教義で妥協しないイスラーム教

このイスラーム教ですが、しばしば我々見ていると極めて過激に見えます。あるいは原理主義的に見えます。確かにそのとおりだと思うのですが、ただ、多分というのは当初のユダヤ教やキリスト教はあまり正確に知ることが出来ないのですが、ブルゲート版以前のキリスト教と比較してみると、おそらくイスラーム教よりも遥かにキリスト教やユダヤ教の方が厳格です。

例えば日本語になっているので言えば、阿部謹也さんがお書きになっているNHKブックスから出ている『西欧中世の罪と罰』という本がありま

すが、それなどを読むとキリスト教世界の禁忌はきわめて厳格です。告解（コンフェッション）という、教会の中で小さな窓に向かって、「きのう私はどここの女性と浮気をしてしまいました」「では、何日間、君はパンとワインで過ごしなさい」というような儀式がありますが、この告解の手引き集をまとめたものがあります。これなどを読んでいると、当時の中世のヨーロッパでははるかにキリスト教の方がイスラーム教よりも厳しい戒律を維持しています。

にもかかわらずイスラーム教が何故我々の世界から見て今も厳しく見えるのか。多分、出だしはより緩やかな宗教でした。例えばイスラーム教は異教徒の存在が前提です。コーランに書いてあります。皆さん天国に行ってみなさい。天国の三分の一はイスラーム教徒と書いてあります。つまり三分の二は異教徒です。あるいはほかの様々な規定もそうなのですが、そんな中でイスラーム教の特徴の一つに宗教に強制なしという特徴があります。これはどういうことかというと、強制的に宗教に入れてはいけないということなのです。宗教に入るためには言葉で宣誓をする必要があります。つまり生まれながらのイスラーム教徒は教条的にはいないのです。キリスト教がヨーロッパに入っていた時に、しばしば一つの町がすべてキリスト教徒になるという現象が見られました。その時には、恐らくその地域の信仰していた神様などが聖人、セイントなどという名前でキリスト教の中に取り込まれていった。つまり、キリスト教は教義で妥協をするのです。

教義で妥協するけれども、その代わり全員に宗教を強いる。それでもキリスト教に転ばない人は最後は魔女になるという歴史を中世のキリスト世界では見ることが出来ます。

ところが、イスラーム教の場合はそうではないのです。入る入らないは自由ですが、その一方で教義で妥協しない。つまり、時代がどんどん新しくなっていくって、昔のままの教義がずっと残っている。これがイスラーム教の特徴だと思います。

そうすると、結果としてキリスト教はその時代時代に合わせて、その時代のニーズに合わせて時には厳しくなったり時には緩やかになったり、そしてその時代の人に受け入れ易いように変遷をしていく。ところが、イスラーム教の場合には、入りたくないのならどうぞ、そのかわり自分の言うことは曲げませんよという態度で来たために、もともとはユダヤ教よりもキリスト教よりも新しい宗教ですから一番受け入れ易いはずなのですが、それがほとんど同じままで来ているために、結果として、我々の時代から見ればイスラーム教の方がどうも過激で、時代遅れで、原理的に見えるというところがあるのではないのでしょうか。恐らくそういった彼らの立場は、一番最初に申し上げましたが、もしかするとアラブ人やイスラーム教徒一般のあの頑固さにも相通じるものがあるのかもしれないです。

(2) コーランの位置付け

その辺は当時のアラブ人と今のアラブ人が違うかどうかは分かりません

が、ただ、イスラーム教は我々が読んでも分かりやすい宗教であります。コーランをお読みになった方はおられますでしょうか。正直言ってあまりお勧めいたしません。何故かという、つまらないのです。新約聖書は物語が多いですが、コーランは物語が少ないのです。あれをやれ、これをやれという説教集なものですから比較的つまらない。そのかわりそれをもとに法律が構成されています。

このコーランですが、法律が実は五つあって、倫理観と一緒に、普通の法律はやらなければいけないこととやってはいけないことと分かれています。ところが、倫理観と一緒にあるために、コーランというかイスラーム法の場合にはやらなければいけないこと、やった方がいいこと、どちらでもいいこと、やらない方がいいこと、やってはいけないことという五つに分かれています。やった方がいいことというのは例えば寄附とか、やらない方がいいことというのは、例えば煙草です。こういうことが書いてあります。ただ、先程ちょっと申し上げましたが、人間は自由意志を有する考える存在です。実は、このやらなければいけないこと、やってはいけないことに絶対がないのです。

どういうことかという、人間が与えられた自由意思はどう使うべきかという一例ですが、例えばワインを飲んではいけないという規定があります。豚を食べてはいけないという規定があります。これはやってはいけないことです。ところがある時、私が砂漠の中をさ迷っていました。道を見

失い、何日も食べていない、飲んでいない。そういう時に目の前に突然トンカツ定食とワインがあったといたします。とすると、これは食べてはいけないのではなくて、神様にもらった体を最大限に生かすという最大の目的のために食べなければいけないものになってしまうのです。これが人間の判断の自由なのです。それがイスラーム教では認められているのです。

このようなことを私はアラブから学んできました。より正確に言えば、自分の価値観と全く違う世界に接するにあたって、常にいろいろなことを考えさせてくれたのです。このように異なる部分を積極的に肯定して考えるという態度は、他人と接する時も同じではないかなという常に気持ちの中に命じているところです。

きょうは、どうもご清聴ありがとうございました。

——おわり——